

令和7年度 学校評価報告書(目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標(令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価(3月26日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①SSHの取組と各教科での取組を関連させ、問題解決能力の育成を図る。 ②新たな教育課程に基づく生徒の進路実現を達成するために指導環境の整備と教育課程の検証・改善および生徒の学習体制の構築を行う。	①ICTを活用した授業展開を行い、学習内容の質を高めるとともに、SSHの取組と教科の取組を結びつける。 ②「指導と評価の一体化」を踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を進め、生徒の自主的な学習の向上を促す。	①各教科で、引き続き授業改善に取り組み、ICTを効果的に活用する。 ①デジタルポートフォリオ等を利用し、生徒一人ひとりが教科を越えて学びの総括ができる仕組みを構築する。 ②指導と評価が一体化した年間指導計画を整え、教科を越えて主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善を進める。	①各教科で、授業改善に取り組み、その成果としてデジタルポートフォリオの活用ができたか。 ②教科を越えた授業改善が行われたか。  ②指導と評価が一体化した年間指導計画が立てられているか。	①11月に公開研究授業を実施し、教育目標に掲げる育成する5つの力に着目し、各教科での取り組みの具体の共有を図った。 ①デジタルポートフォリオの活用目的に立ち返り研修等を行ったことで、教員間の共通理解を深めることにつながった。6教科11科目での取り組みがデジタルポートフォリオとして「Pサイト」に掲載された。 ②成績処理の書式を統一したことで、担当者以外でも評価基準に基づく評価を明確に行えるようになり、他科目の達成度を踏まえた横断的な授業展開や指導の検討が可能となった。	①教科間での取組を共有しやすい体制の検討が必要。 ①目的の共有・理解に焦点をおいたために、活用した科目が昨年度と同程度に留まった。次年度の年度当初に全体での研修を実施し、科目担当者が実施しやすい体制を整える。 ②教科横断的な活動や前年度の達成状況を加味した評価規準をもとに、年間計画を作成し、達成に向けた指導の工夫を図る。	・大学での実践の中で、ポートフォリオの効果が絶大であることを実感している。ポートフォリオ活用の好事例を教員間で共有したり、生徒に「期待すること」として示したりすることが最も推進力になるはず。 ・公開研究授業では育成する5つの力に基づく取組が共有され、教科横断的な視点での改善につながっている一方、教科間で取組を共有しやすい体制づくりや、年間指導計画への反映を強めることが今後の課題。	①次年度以降も、共有すべき課題を設定したうえで研究授業の計画・検討を継続して進める。 ①デジタルポートフォリオの活用事例を積極的に共有し、教員・生徒ともに取り組みやすい体制をさらに整備する。 ②次年度入学生より教育課程の改編が行われるが、生徒の主体的・対話的で深い学びの改善につながる指導計画を策定する。	①研究授業の企画・検討を早期に行う。 ①デジタルポートフォリオの2年後の終着点を示した上で、活用事例を示していく。 ②現在の学習状況をもとに、選択科目への興味・関心が文理選択時の選択理由や進路意識に反映されているかを調査する。また、指導と評価の計画が新たな教育課程を意識したものとなっているか整理する。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①日々の学校生活や生徒会活動の場面で、自発的・主体的に行動できる人材の育成を図る。 ②教育相談体制を充実させ、支援が必要な生徒に対して柔軟な働きかけを行う。	①学校行事や部活動など学年を越えた集団活動を通して、個々の役割を自覚し、それぞれの責任を果たす姿勢を身に付けさせる。 ②教育相談体制を整え、組織的な支援ができるよう生徒の情報を職員全体で共有し、すべての生徒が健康で安全な学校生活を送れる体制を整える。	①主体となる生徒との連携を密にし、情報共有を行い、支援・指導が必要なポイントを絞り、安全で安心な活動を保障する。 ②各学年の教育相談担当者を中心に、学年会等を通じて生徒の現状を把握し、定期的な情報共有の機会を設定する。また、家庭やSC・SSWと連携を図りながら課題の解決をサポートする。	①健康的で安全な行事が実施されたか。生徒の主体性を支援することができたか。  ②定期的な情報共有の機会が設定できたか。 ②課題を抱える生徒に対し、様々な視点を持った多くの職員がかわるることによって、多角的に支援することができたか。	①記念祭・球技大会・合唱祭など、委員の生徒中心に実施し、その活動をチームとして支援することができた。 ②サポートドック・教育相談担当者会議などを通じ、学年・担任・教育相談担当・SC、SSWが連携し、様々な生徒の課題に組織的に対応することができた。	①生徒から体育祭の実施、記念祭の決済方法に関する提案があり、実施や方針について検討を進めている。 ②生徒の規範意識向上、特にSNS利用のリテラシーの育成が課題であり、支援方法の明確化と職員のスキルの向上と指導方法の共有化が必要。 ②さまざまな特性や家庭環境を抱える生徒へ、適切な支援スキルの更なる向上が必要である。	・生徒の多様な背景に応じた支援が丁寧に行われ、行事や部活動での成功体験が自己肯定感の向上につながっている。スクールカウンセラーやサポート体制の活用も進み、早期発見・早期対応が機能している。 ・SNSトラブルへの対応など規範意識の育成が引き続き課題であり、情報リテラシー教育の強化が求められている。	①生徒主体の行事運営を進めてきたことが、新たな企画を生徒自身が提案する姿勢につながっている。今後は、これらの取組をより良い形で制度化し、継続的に発展させていく体制づくりが課題である。 ②教員・保護者と生徒ではスマホ・SNSの使用に関して危機感が大きく乖離している。生徒に規範意識を育成する必要がある。	①行事の目的を改めて見直し、従来どおり実施するのではなく、生徒の成長につながる行事運営を行うとともに、学校関係者や地域住民にも受け入れられる運営を進める。 ②HRや学年集会、全校集会、各教科での指導などを通じて、生徒の規範意識の向上や情報リテラシー教育を推進する。 ②他校と情報共有、外部機関との連携を通じ、職員の指導力向上を目指す。
3	進路指導・支援	①なりたい自分を探求し、その実現を目指すための進路行事や学習活動を充実させる。 ②個別面談、教員研修を通じ、新たな教育課程や入試制度に柔軟に対応することのできる支援体制を構築する。	①生徒の個々の進路目標を見据えた進路指導・進路行事を計画し、その充実を図る。 ②面談や模擬試験の機会を活用し、生徒の悩みや進路実現に向けた適切な支援を行う。	①生徒が多様な選択肢を理解し、具体的な進路をイメージできるような進路指導・進路行事を計画し、その充実を図る。 ②模擬試験の振り返りや面談を通して、生徒の強みや弱みを把握し、具体的な対策や学習計画を支援する。	①適切な時期・内容でキャリアガイダンスを行うことができたか。  ②模擬試験の振り返りや面談を通して、生徒の課題の把握やフィードバックができたか。	①ミニオープンキャンパスや校外学習を通して生徒が確実に上級学校に触れる機会を作ることができた。 ②模擬試験を区切りとし、その振り返りの講演会を行うことができた。また、面談等を密にし、生徒と進路について確認できた。	①ミニオープンキャンパスや校外学習で訪問する上級学校の選定を精査し、生徒がより幅広い視野を持てるよう機会を充実させる。 ②模擬試験の結果のフィードバックの仕方・時期について精査し、より効果的な計画を検討する。	・進路選択にあたり、探究成果を進路に生かす接続の見える化や、科学分野に限らず、探究で身につく論理的思考力や表現力が進路実現に確実に生きるため、その価値を生徒自身が言語化し共有できる機会をつくることが望ましい。	①ミニオープンキャンパス・校外学習ともに生徒たちが上級学校を知る、体験するのに重要な機会となった。 ②模擬試験を区切りとし、講演会を開催するなどしてその結果を活用できた。	①ミニオープンキャンパス・校外学習ともに見学、体験する上級学校を生徒の知見を広げるなどの意義から精査する。 ②模擬試験の評価を蓄積・系統化して、より指標になるよう解析していく。

	視点	4年間の目標(令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価(3月26日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
4	地域等との協働	<p>①家庭や地域、同窓会等との協働を進め、信頼される学校づくりの更なる発展を目指す。</p> <p>②SSHの活動において他の教育機関や企業・地域との連携を強め、コンソーシアムの構築を目指す。</p>	<p>①保護者や地域住民等と協働・連携した教育活動や地域貢献活動等を充実させ、様々な手段で外部に発信する。</p> <p>②今年度より課題研究で実施する外部メンターによる指導・助言を受け体制を整え、課題研究の内容の充実をはかる。</p>	<p>①学校ホームページ、学校説明会、文化祭及び地域貢献デーなどの行事を通じて、地域の小中学校と連携した実績やSSHの取組について発信する。</p> <p>①同窓会活動への理解を深めるために協働して活動の改善点を検討していく。</p> <p>②外部メンターとして生徒に指導・助言を定期的に行ってもらう。</p>	<p>①学校ホームページ、学校説明会、文化祭及び地域貢献デーなどの行事を通じて本校の取組を発信できたか。</p> <p>①同窓会と連携し活動への理解が深められたか。同窓会入会者の数が増えたか。</p> <p>②外部メンターの方から直接指導を受けた班の数および指導を受けた回数で図る。</p>	<p>①学校説明会では生徒会生徒の主体的な活動により、わかりやすく丁寧な説明ができた。</p> <p>②SSH運営指導委員、横浜大学や産業能率大学、また本校卒業生の方など計11名の方に外部メンターとして2学年の課題研究の指導にあたってもらった。月1回をベースに、今年度は計17回対面およびオンラインでの指導を行ってもらった。生徒のみならず教員も外部メンターの方の指導からの学びを得ることができた。</p>	<p>①中学生や保護者が知りたいことを発信できているか内容の丁寧さを更なる充実させたい。</p> <p>①同窓会との連携についても、生徒が支援を実感できる形を検討し、活動の見える化を進める必要がある。</p> <p>②外部メンターとの協働を今後も継続できる体制の整備が課題であり、関係機関との連携をより強固にし、次年度以降も継続可能な仕組みを検討する。</p>	<p>・学校説明会の生徒会主体の運営がわかりやすく好評とのこと。受験生・保護者が知りたい情報の整理を行って更に改善を。</p> <p>・同窓会支援の“見える化”を進める必要がある。</p> <p>・外部メンターによる指導は生徒・教員双方に効果が高く評価されているが、協働を継続できる体制づくりと関係機関との連携強化が今後の課題。同窓会をもっと活用するとよい。</p>	<p>①外部メンターの指導や、同窓会主催の講演会など、生徒と同窓会との接点が増えている。今後も、こうした取組の“見える化”をさらに進める方策を検討し、継続して実施していくことが求められる。</p> <p>②外部メンター制の導入により、生徒の探究活動は明確に深化し、教員にとっても指導方法を見直す良い機会となった。一方で、この取組を継続できる体制をどのように構築するかが大きな課題である。</p>	<p>①同窓会や外部メンターとの連携について、生徒が支援を実感できるよう取組内容や成果の見える化を進め、学校説明会や学校HP等を活用して情報発信を強化する。</p> <p>②外部メンターによる指導の効果を継続・発展させるため、関係機関との連携を一層深めるとともに、新たな連携先も模索し、次年度以降も安定的に協働できる体制の構築を図る。</p>
5	学校管理 学校運営	<p>①働き方改革に向けて、TeamsやICT機器の使用法を更に思索し業務の効率化を図る。</p> <p>②社会から求められる様々な教育ニーズに対応できる教員指導力の向上を目指す。</p>	<p>①各種の研修を通じて、教職員のICT活用スキルを高める。</p> <p>②人権や教育相談の視点から生徒との関わりを再点検する。</p> <p>②学校教育目標に掲げる5つの力の育成を意識した教員研修を計画・実施する。</p>	<p>①各種の研修定期的に開催し、教職員のICT活用スキルを高める。</p> <p>②様々な研修会を通して、人権や教育相談といった視点から、これまでの教育活動を見直す機会とする。</p> <p>②職員会議など定例の会議を活用し、短時間での研修を行い、生徒がメタ認知できるような活動内容・評価方法を検討していく。</p>	<p>①教職員対象のICT活用スキルを高める研修を実施できたか、また教職員のICT活用状況から図る。</p> <p>②研修を通じて、職員の共通理解が深まったか。</p> <p>②教員対象の研修を実施できたか、また教員の取組内容の内容を共有できる体制を整えることができたか。</p>	<p>①民間講師による研修を通して、教員のための生成AI活用について学び、教材研究等、実際に業務で活用し、効率化を図っている。</p> <p>②地区PTA講演会で好評であった講師を招き、在校生、教員それぞれに講演を行った。性教育から命の大切さ、他者へのおもいやりを育むことへの理解が深まった。</p> <p>②授業改善研修において、探究的な学びの本質や指導の在り方を再確認し、正解や成功にとらわれず、学びそのものを楽しむ姿勢の重要性について理解を深めた。</p> <p>②メタ認知とはなにか、授業の中でメタ認知を促す振り返りの場面を設ける重要性を学ぶことができた。</p>	<p>①AIの活用例を共有することで、一部の教員だけでなく学校全体として業務の効率化を図っていく。</p> <p>②人権教育や教育相談に関する校内の支援体制を強化し、教員が生徒の多様な背景に応じた指導・支援を行えるよう、研修内容の実践への落とし込みを今後さらに進めていく。</p> <p>②各教科が実施している、メタ認知を促す具体的な活動や評価方法の共有化を目指す。</p>	<p>・AI活用はもはや避けられない時代であり、思考力の伸長につながる活用方法の発信や実践の蓄積が期待されている。研修を踏まえ、生成AIによる業務効率化を校内全体に広げることを期待する。</p> <p>・外部講師による講演は貴重な機会である一方、それを単発のイベントに留めず、授業改善や教育課程と往還させることで、命の教育や人権理解をより深める実践につながる必要がある。</p> <p>・メタ認知を促す授業づくりについては教科を越えた共有と具体的手法の蓄積が求められる。学校が目指す5つの力の育成に向け、研修内容を日々の指導へどのように実装するかが今後の大きな課題である。</p>	<p>①ICT活用や生成AIに関する研修を通じて、教職員の業務効率化や指導力向上につながる取組が進んだ。</p> <p>②人権や教育相談、メタ認知をテーマとした研修を通して、教育活動を見直す意識が高まった。一方で、研修内容を個々の実践にとどめず、学校全体の指導改善にどのように定着させていくかが今後の課題である。</p>	<p>①生成AIやICT活用の好事例を校内で共有し、業務効率化や授業改善の取組を学校全体に広げていく。</p> <p>②授業改善研修の期間を長めに設定し、日々の授業において互いの授業が見やすい環境を整えていく。</p> <p>②研修で得た知見を授業や生徒支援に確実に生かせるよう、教科や分掌を越えた共有の場を設け、メタ認知を促す指導や人権・教育相談の視点を日常の教育活動に定着させていく。</p>